

平成 30 年 4 月 10 日参議院文教科学委員会議事録

○松沢成文君 希望の党の松沢成文です。

今日はオリパラの担当大臣、鈴木大臣にも来ていただいていますので、東京オリパラ大会のボランティアの問題について質問していきたいと思います。

先月の二十八日に、組織委員会は、大会期間中に活動するボランティアの募集要項案というのを公表いたしました。

オリパラ大臣、ここでいう東京オリパラ大会におけるボランティアの定義はいかかなものでしょうか。

○国務大臣（鈴木俊一君） 東京オリパラ大会におけるボランティアの定義ということでございますが、先生御指摘のとおり、三月二十八日に公表された組織委員会それから東京都のボランティア募集要項に規定をされております。

組織委員会が募集します大会ボランティアは、大会の期間中及びその前後に大会運営に直接携わり、大会の雰囲気醸成するメンバーの一員と規定されております。

また、東京都が募集します都市ボランティアでは、開催都市東京の顔として、選手を始めとする大会関係者や国内外からの旅行者、観光客等をおもてなしの心をもってお迎えし、大会に花を添え、盛り上げの一翼を担う大会メンバーの一員とされております。

○松沢成文君 ボランティアというと、ちょっと一面的な理解が進んでいまして、無償で働く人というイメージがかなり日本では広まっちゃっているんですね。でも、これは、間違いというかちょっと誤解があって、ボランティアという英語の語源は自発的に奉仕活動に参加する人という意味が強くて、最初によく使われたのは、これは志願兵で、ボランティアソルジャーといって、正規の兵隊じゃなくて自分たちが志願して軍隊に入ってこの国を守ろうという人たちをボランティアというふうになって広まっていたんですね。

ですから、無償で働かせる人という意味ではなくて、やはり自発的な意思で社会に貢献する活動をする人、こういうふうに捉えるべきだというふうに私は思っているんです。逆に言えば有償ボランティアというのもあり得るんですよ。何かボランティアというと、お金払っちゃいけないと、無償で働く人というイメージ強いんですが。その典型的なのが、例えば青年海外協力隊です。あの皆さんは志願して、海外でいろんな協力活動をしたいと。でも、いろいろな経費が掛かりますし、生活もしていかなきゃいけないから、ちゃんとお手当は出るんですね。こういうボランティアもあるということで議論を進めていきたいと思うんです。

さあ、文科大臣いらっしゃっていますから、この組織委員会は、いわゆる大会ボランティアとは別に中高生ボランティア、例えばテニスのボール拾いだとか、バスケ会場のモップ掛けですとか、こういうことをお手伝いいただくボランティアの募集を明らかにしていますが、組織委員会は子供たちが世界的イベントに携わることは教育的価値が高いとして高校生ボランティアの教育的価値を強調していますけれども、文科大臣はいかがお考えでしょうか。

○国務大臣（林芳正君） 大会組織委員会は、次世代を担う若年層が大会運営に関わることは教育的価値も高く、スポーツボランティアの裾野を広げる観点からも未来につながる有意義な取組であるとして、大会ボランティアとは別に、ボールパーソンとか、それからモップ掛けなど、競技の支援を始め、中高生等の大会運営等への参画について検討していくこととしておるところでございます。

現在のところ、活動分野や募集方法、また学校等の関与の仕組み等の詳細がまだ決まっておきませんので、今回の組織委員会の取組の教育的価値について具体的にお答えすることは困難でございますが、一般的に中高生等のスポーツボランティア活動につきましては、スポーツを支える活動の中で多くの人と関わりながら社会に役立つ活動に主体的に取り組む人間に成長していく基盤になるものだと考えられているところでございます。

○松沢成文君 オリパラ大臣、ちょっと時間がないので二問ほど飛ばしますけれども、この大会ボランティア約八万人、大変な数ですよ。それから、東京都が募集する都市ボランティア三万人、合わせて十一万。さらに、中高生ボランティアというのも募集していく。それから、地域の会場では都道府県、都以外ですね、各県がそれぞれまたボランティアを募集していく。そうすると、多分総勢は十二万とか、それぐらいのボランティアを募集するということになると思います。

さあ、そこで、この大会ボランティアは、例えばオリンピックの期間、二週間ぐらいあると思いますが、十日間以上働くわけですね。それで、全ての事前研修にも参加するんです。これ、全部自前でやってくださいということになっていますが、私は、ボランティアの皆さんの自発的な意思を尊重するために、労務費については自分の意思で働くんだからお手当やお給料は出す必要はないと思いますが、これ参加するのにめちゃくちゃお金掛かるんですよ。まず、事前説明会、研修会で四日間、東京なり、あるいは説明会であったら各地方都市でもやるんでしょう。行きますよね。それから十日間、今度通ってこなきゃいけない。おうちから通えない人、自宅から通えない人は、必ず宿泊施設をどこか取らなきゃいけない。都心の宿泊施設は物すごくホテルの値段上がっちゃっていますから、そんな高いところ泊まれない

とって郊外に宿を取る。そうしたら、そこからまた交通費が掛かるわけですね。

これ、労務費のみならず交通費や宿泊費も全て無償なんですか。

○国務大臣（鈴木俊一君） 大会ボランティア募集要項におきましては、大会の東京などの会場が所在する都市までの交通費、それから宿泊はボランティアの自己負担、それから宿泊については自己手配というふうになっております。

これは、今案として示されているわけでございますけれども、ボランティアの参加条件、待遇につきましては本年七月下旬に募集要項の公表をするわけでございますが、それに向けて、今組織委員会において関係の方々の御意見を伺いつつ更に検討されることになっております。例えば、組織委員会においては、毎日の活動に必要な交通費、これは都内の移動とかそういうことだと思いますが、これについては検討中であると承知をしております。

○松沢成文君 そうしたら、是非とも国会の方でもこういう声が上がっているということをお知らせいただきたいんですね、組織委員会に。

これ、ボランティアに参加する人に全て研修会も説明会も自前で来い、毎日自前で通ってこい、それで遠くの方は宿泊自前で取れ。それで、東京の大会のボランティアは、物すごく暑いので、その暑さの中で八時間も、自分の行きたい場所でボランティアできる人はいいですけども、そこが人気があるといろんなところに回されるわけです。例えば屋外のところで競技場に入るための観客の交通整理とか、これ大変ですよ、三十五度か四十度あるかもしれない。そういうことに回る人もいるわけですね。

ですから、私は、物すごく金銭的にも体力的にも負担の掛かる大変な作業をやっていただく方が多いと思っています。そういう人たちの労に報いるためにも、最低限の交通費や宿泊費、これはもう定額でもいいですよ、これ幾ら掛かったんだ、実費を申告しろなんていうと、また領収書がどうのこうのって大変な作業になっちゃうから。例えば、一日五千元、これを宿泊費や交通費に充ててくださいということで、そういう条件を付けてボランティアの皆さんを迎えないと、私はボランティアの辞退者が相当出てしまう可能性があるというふうに思っております。

定額あるいは最低限度の額の宿泊費の定額補助みたいなことを考えるべきだと思うんですが、いかがでしょうか。

○国務大臣（鈴木俊一君） 先ほど申し上げましたとおりに、今示されておりますボランティア募集要項のこれは案でございますが、それについては交通費それから宿泊費は自己負担ということになっておりまして、宿泊の手配も自分でやると、こういうことになっておりま

す。

先ほどちょっと言い忘れましたけれども、東京都及び組織委員会で東京二〇二〇大会に向けたボランティア戦略というのが策定されておりますが、その中には宿泊に関する情報提供については検討すると、こういうことになっているところでございます。

定額でもいいから経費の一部を負担しろと、負担できるようなことはできないかと、こういうことではございますが、先ほど申し上げましたとおり、今の要項案では自己負担となっております。ただ、オリンピック、パラリンピックという大変大きな大会を成功させるためには、やはりボランティアの方が気持ちよくボランティアをできる、またボランティア活動をするに当たっても活動しやすいという、そういう環境を整えるということはこれは重要なことであると思いますので、先生からの御指摘も受けまして、組織委員会始め関係方面ともいろいろ検討させていただきたいと思っております。

○松沢成文君 組織委員会は、昨年末、大会経費バージョン2 というのを発表していきまして、収入約六千億あるわけです。六千億で何に使うかという、ハード整備、これ仮設施設の整備とか、あるいはソフトの場合は警備とか様々な運営に使っていくわけですね。

それで、例えば、十万人のボランティアが二十日間、最低十日間やってくれというんだから、オリンピックとパラリンピックあるので二十日間、十万人のボランティアが二十日間、一人、日当を交通費も全て含めて五千円の定額で支給する場合、これ僅か百億円なんですね。六千億の組織委員会の経費集まったわけです、予算が集まったわけです。スポンサー企業も大分寄附して、半分ぐらい寄附で集めていますよね、スポンサーシップで集めています。それから、入場料収入というものもあるんでしょうけれども、私は、六千億の組織委員会の予算の中で、たかが百億前後のボランティアに対する最低の経費を出しても私は十分やっていけるんじゃないかと思っておりますけれども、大臣はいかがお考えでしょうか。

○国務大臣（鈴木俊一君） 先生のお話のとおり、大会組織委員会、十二月に公表した予算によれば、収入は総額六千億でありまして、そのうち国内外からのスポンサー収入、企業からの収入は三千六百六十億円と、こういうふうになっております。

これの使い方でありまして、大会経費の総額は現時点で一兆三千五百億円と見込まれておりまして、これだけではもちろん、組織委員会だけのお金では足りないわけでありまして、東京都や国の公費も活用せざるを得ないという財政状況の中で、組織委員会として大会運営に万全を期すべく、関係機関と協議の上で予算の優先順位を決定をしているところでございます。

先ほど申しあげましたとおり、大会ボランティアは原則無償でと、こういうことになっております。しかし、一方において、繰り返しになって恐縮でありますけれども、オリンピック・パラリンピックという大きな大会を成功させるためにはボランティアの方に気持ちよくボランティア活動をしていただく、そういう環境を整えなければいけないとは思っておりますので、一体どういうことができるのか、そういうことを含めて、今後、七月に最終的な募集要項が決まりますので、検討させていただきたいと思います。

[○松沢成文君](#) ロンドン大会はボランティア七万八千人だったそうです。リオ大会は五万人だったそうです。ここは、ボランティアは全部無償でやってもらっていますね。ただ、いろいろやっぱりトラブルがあって、リオ大会は五万人のうち一万五千人がボランティアを辞退しちゃっているんですね。これ、余りにも過酷で、もう組織委員会の要求ばかりが強くてやっていけないということで、抗議の辞退ですね。

それから、平昌の五輪は、実はこれは郊外というか地方都市でやったということと余りにも寒かったという条件があったので、ボランティアには報酬というかな、出ています、お金が出ているんですね。でも、それであっても、やっぱりボランティアというのは、残念ながら、アスリートファーストですから、選手を最優先で移動したりしてもらいます、それから観客を次に大切に扱います。ボランティアというのはどうしても最後に置かれちゃって、何と宿に帰れない、帰るバスを三時間、零下二十度の中で待つ、こういう過酷な条件の中で、実は平昌でも、一万八千人のボランティアの中で開会式前に二千人がもう辞退しちゃっているんです、こんなのやっていられないということで。

ですから、ボランティアの皆さんに気持ちよく働いてもらうためには、私は労務については自発的意思を尊重すべきだと思うけれども、最低限掛かる経費の、全額とは言わない、最低レベルの額でもいいからきちっと保障してあげる、あるいは保険もきちっと掛けてあげる、あるいは宿の面も、ホームステイをシステム化して、ボランティアの皆さんが近くで滞在できるようにホームステイでサポートしてあげるとかね。これもまたボランティアですよ。それぐらいのことをしっかり考えていかないと、このボランティアの戦略というのはなかなか難しいと思いますので、是非とも御検討をよろしくお願いします。

ごめんなさい、長引きまして。以上です。